

## [03\_01]九州大学大型計算機センター広報 : 3(1)

<https://doi.org/10.15017/1467966>

---

出版情報 : 九州大学大型計算機センター広報. 3 (1), pp.1-55, 1970-02-24. 九州大学大型計算機センター  
バージョン :  
権利関係 :

方などが主なものでした。最近、実行中のエラーに集中してきたようです。

指導員をしていて感じる小さい喜びの一つは、長い間相談に応じていた人から「この間からのプログラムはうまく実行できるようになりました。」と声をかけられるときです。「プログラム相談を引きうけると自分自身の勉強になるので、一般の利用者も少しプログラムが書けるようになったら、指導員になれるのも良いのではないか。」という声もありました。

プログラム相談にまだ慣れていない時期に、センター職員の未熟さから、各連絡所の指導員や利用者の方々に、ちぐはぐな返答をして、大変ご迷惑をかけたことと思います。誌上からお詫びいたします。

## 遠隔地利用者の希望

(指導員講習会懇談会より)

懇談会の席上、特に遠距離でジョブの郵送時間がかかると思われる連絡所の指導員の方から次のようなご希望がありましたので次にあげてみます。

◎ 連絡所からの利用の場合、穿孔後計算というシステムを作ってほしい。

センターとしては必ず穿孔ミスがあるから、利用者の手で1回渡してチェックしてもらうのを立前としていました。計算機にかけるといことは大きな責任問題となるわけです。ところが、1回のチェックで穿孔ミスをすべて洗い出すことはむずかしく、コンパイル時点でエラーとなることが多いので、郵送時間を1回分短縮するという意味でも、穿孔後計算を作ってほしいという希望があります。考えてみますと、FORTRANの場合などは、1回のコンパイルによってほとんどのエラーを見つけることができます。ご希望の方についてはこの穿孔後計算を行なったかどうかと、現在センターで検討しています。

◎ 計算後センターで結果をチェックしてほしい。

これも郵送時間の短縮に関する問題ですが、計算結果をチェックして修正できる場所は修正して計算してほしいという意図はよくわかりますが、電話で連絡をとるにしても東大センターにおける経験からみても決してうまく行くとは思えません。センター職員は上記のチェックなどの作業の責任は持たませんのでご了解ください。

◎ ジョブの実行中にジョブ種別を変えたい。

これは、Aジョブを実行してうまく進行した場合、Bジョブに変えて実行したいという意味ですが、九大センターのシステムでは行なえません。

この他に、各連絡所の現状についてのお話の中で、プログラム指導員が利用者の相談に応ずるのはもちろんのこと、ジョブの受付、荷造り、発送の仕事までせねばならない所や、計算依頼のたびに公

文書を必要とする所もあることをお聞きし、センターとしては少々びっくりしました。指導員の方々のご協力に感謝し、また共同利用のセンターが理解され、早く連絡所が利用しやすい体制となることを望んでいます。

## 利用者としての一提案

桜井 晃

センターの発足以来利用してきた者の一人として、特にセンターの運営について感じたことについて書いてみたい。もちろん現在は仮設センターなので様々な不便があるのは当然であり、むしろ今のレベルで運営されていることに對しセンターの方々に感謝しなければならないと思う。問題は、本センターができ上ってからのことであり、そのときに本格的に考えなければならない問題のいくつかがすでに現われているように思われる。

基本的なこととして考えさせられるのは、大学における計算センターは、我々が単なるユーザーとしてブラックボックスから答を引き出すように利用できるものであると考えてはいけないのであって、我々研究者もセンターを動かしていく者の一人であるという意識を、センター、利用者ともにはっきり持たねばならないのではないかということである。

たとえば、ここしばらくの内にもシステムの改訂、デバッグなどが常に行なわれてきたようであるが、計算機及びそのシステムが速いペースで進歩している現在においては、このような流動的な状態は、計算機を最大限に利用していかねばならない大学の研究者としてはむしろ歓迎し、積極的に協力していかねばならないものであろう。センター側でも、最新のシステムの状態、障害の状態などについて利用者とすばやい連絡を取って、ともに進歩して行くという姿勢が望まれる。

また利用技術の面でも、センターと利用者がより一体化しなければ有効に解決できない問題が多い。たとえば、新らしくプログラムを書きはじめる大部分は、講習会やマニュアル類でどのような書き方が文法で認められているかということを学んだあとで、実に長い間かかって失敗を繰り返し先輩の話聞きかじって、実際にはどのような書き方が便利で間違いが少ないか、デバッグはどうやれば良いのかといったことを学んでいる。センターの限られた計算能力を活用するために、また良いプログラムを書ける人間を世に送り出すという教育的見地からも、現在独学やら耳学問やらで行なわれている、上記のいわばポスト・グラジュエットのなプログラミング教育が有効に行なわれることが今後ますます大事になるように思われる。しかしこのようなことは、人員的にもセンターだけで行なうことは不可能であるし、また長年利用者の間に積みあげられてきた経験を整理して生かすのでなければ意味がないわけである。まず手始めには、センターと経験の長い利用者との協力で、よく起きるエラーを防ぐにはどうしたら良いか、計算時間や記憶場所の最適化の方法、FACOMの機